

日 時： 2022 年 11 月 13 日（日） 14：00～16：00

講 師： Normal Screen、Political Feelings Collective

会 場： 池袋キャンパス・タッカーホール

今年度の映画上映会は、マーロン・リグス監督によるドキュメンタリー映画『タンズ アンタイト』（原題：Tongues Untied、1989）を上映いたしました。上映後には、本作の日本語字幕製作に携わった翻訳出版集団ポリティカル・フィーリングス・コレクティブと上映団体ノーマル・スクリーンから講師をお招きし、映画の制作背景についてお話しいただきました。

アフリカ系アメリカ人ゲイ男性であるリグス監督による本作は、アメリカ社会の中で黒人ゲイ男性が、いかに差別や無理解に晒されてきたかを物語る作品です。とりわけ本作は、黒人男性コミュニティおよびその文化の只中において、ゲイ男性の語りがより苛烈に抑圧され、生存のためには自身のアイデンティティを秘匿せねばならなかったことなどに焦点を当てています。例えば、異性愛主義的な家族や性の規範を訴える黒人牧師やブラック・ナショナリズムの活動家、あるいはスタンダップのコメディアンが放つホモフォビックな侮蔑の言葉などが映像素材と共に引用され、それと対比するように画面には本作の主要な登場人物の一人である詩人のエセックス・ヘンプヒルの沈黙する姿が映されます。BLM 運動以降、社会運動や批評理論において再注目されている「インターセクショナルリティ」という複合差別に着目した概念は、批判的人種理論の研究者キンバリー・クレンショウが 1989 年に造語したものとして知られていますが、まさにそれと同じ年に公開された本作は、現在の私たちに、この言葉の育まれた当時の社会状況を多層的に伝えるものといえます。

上映後の解題では、本作で多用される詩の引用や韻を踏んだナレーションについて、リグスたち黒人ゲイ男性が、黒人レズビアン詩人オードリー・ロードや、ブラック・フェミニストたちのグループ「コンバヒーリバー・コレクティブ」による詩作活動に多大な影響を受け、自らの経験を語る術を獲得したことなどを解説していただきました。また、リグスやヘンプヒルをはじめとする本作の出演者たちの多くは、制作後、HIV/AIDS によってこの世を去っており、本作の後半でも HIV/AIDS をめぐる社会不安とゲイ男性への嫌悪のみならず、ゲイ男性の中の親密な関係にまで亀裂が生じてしまったことが取り上げられます。解題セッションでは、その一方でリグス監督が、本作の制作を進める中で黒人ゲイ詩人たちとの出会いを通じ、当初の予定を変えて自らにカメラを向け、

自身の私的な経験を語ることを決意したことが紹介されました。これに関して、本作が当初 3 軒のゲイバーでの上映を想定していたという点について、当イベントを企画した新田啓子所員から、当事者だからといって自分たちのことを語れるわけではなく、だからこそアーティストが先んじて表現活動を行い、それを当事者が見ることの重要性があると言及されました。

以上のように本上映会は、人種的・性的マイノリティへの複合差別について理解することに留まらず、人が自身や他者を否定することなく尊厳を持って生きること、そこに文学や芸術がいかに寄与しうるかを深く学ぶ機会となりました。豊富な資料と共に充実した解説をしていただいた講師の方々、そして久々の対面イベントにご参加くださった来場者の皆様にも心よりお礼申し上げます。

（立教大学ジェンダーフォーラム事務局 片岡佑介）

